神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Deporte moderno e identidad vasca : ahletic club de bilbao

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2006-06-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 竹谷, 和之, Taketani, Kazuyuki
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/642

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

近代スポーツとバスクアイデンティティ

―Athletic Club de Bilbao―

竹　谷　和　之

問題の所在

近代思考がエスニック社会の多様な変容を可能にする例は枚挙にいとまがない。初期は強制であっても，当該社会がその思考を受容していく場合，または価値基準がことなり当該社会の基準に合致した方法を選択する場合，あるいは全く違和感が無く受容が容易な場合，などである。たとえばジンバブエのサッカー，ニューカレドニアのクリケット，バスクのサッカーである。すべてイギリス社会との連関を有しているが，植民地主義とともに伝播する事例は前2者であり，最後のバスクは受容形態は他とはことなる。

「われわれ意識」は他との差異化がなされるときに前面に押し出される。これは選択（境界領域の設定）の基準となることもあり，すでに作られたステレオタイプ的表現の確認となることもある。そしてこの動態的状況を「語る」ことは，また固定化された「語り」が一人歩きすることでもある。

さまざまな地域の民族スポーツが語られるときに，このような枠にはめられて意識されることは多い。つかみ所のない定義よりも，容易に理解できるからである。つねに異文化と接触したり思考に変化がでてくれば，当然民族スポーツも影響を受ける。ここでは民族スポーツ文化変容を中心にするのではなく，近代スポーツがどのように変容させられていくかを，受容母体のアイデンティティ変容過程を見ながら進められる。これはつまり「土着化 autóctono」という言葉の深淵へ接近することでもある。

本論はバスク地方に伝播した近代フットボール，とくにアスレティック・クルブ・デ・ビルバオ，がバスク社会で受容されていく過程で重要なユース育成機関カンテラ cantera の存在に焦点を当てる。カンテラはスペイン語で「採掘場」という意味であり，将来有望な「原石＝選手」を発掘する場所である。

バスクでのフットボールは，レアル・マドリッドやバルセロナFCとともにスペイン初期のフットボール史を形成しており重要な位置にある。さらに，「ビルバオ」や「バスク」というアイデンティティが前面に押し出される時には，歴史の襞が意識されるときでもある。その襞こそが文化の多様な変容を可能にするのである。

先行研究として，J. マックランシーの論文 “Nationalism at play: The Basques of Vizcaya and Athletic Club de Bilbao” in *Sport, Identity and Ethnicity* (1996)，スペインフットボールを概観するものとして『バルサとレアル　スペイン・サッカー物語（2002)』がある。本研究は以上に加えてアスレティック・クルブ・デ・ビルバオが独自に作成した資料や文献，およびアスレティック博物館担当者や関係者への聞き取り調査をもとにして作成される。

1．現在のバスク

「バスク」といっても現在その定義は複雑である。「バスク」と言うとき，スペインバスク州とナバラ州，そしてフランスバスクの３地方を指して言う。これは両国のバスク研究者も含めた内外の一致した政治的地理的定義である。さらに政治的規定ではスペインバスク州のみになり，文化的定義とされた他の州やフランスバスクは除かれることになる。しかしバスク人の定義となると極端に曖昧になる。かつてはバスク語を話す人たちを指していたが，もはやこれは通用しない。スペインではフランコ独裁によるバスク語使用禁止令が彼らの日常生活に重大な影響を及ぼした。バスク語だけでなく，舞踊やカー

ニバルなども禁止の対象となった。日常語はスペイン語を使用し，労働者が外部から流入し，混血も進み，従来のバスク生活が変化し始めたのである。

しかしフランコ独裁当時，一般家庭ではなおバスク語教育が行われ，またバスク文化消滅の危機を感じた親たちは，家の一室を教室にし，バスク語や音楽などを子供に伝授しようとした。これが現在のイカシトラ（Ikastola）へと発展していくのである。

フランコ死後，スペインでは17の州が認められ，バスク州やナバラ州も地方自治州として認められた。中央政府からかなり自由に独自の政治や教育が可能となったのである。公用語はバスク語とスペイン語である。

一方フランスでは，スペイン・フランコ時代のような禁止令は実施されなかった。バスク語は自由に話すことができ，バスク旗も掲げることができた。しかし，フランス語が公用語として強制されたため，結果としてフランス語がフランスバスクに浸透することになった。

バスク語以外にバスクを確認できる装置が，バスク舞踊，バスク音楽，詩吟，そしてバスク民族スポーツである。とくに民族スポーツは娯楽として禁止を免れた。フランコ時代は国家警察が見守る中，競技は粛々と実施された。しかし近代スポーツであるフットボールはフランコの後ろ盾があり，バスクにおいても推奨されたのである。

2．ビルバオとバスク

バスクの大都市ビルバオは，起源8世紀頃から鉄鉱石の採掘により，鉱工業の発達が著しかった。とくにリア（潮汐の変化で水位がかわる）西岸には良質の鉱山があり，鉄だけでなく造船業も発達した。世界史に登場する無敵艦隊は，このバスクで造船されたのである。

その後19世紀後半からイギリス産業革命とともに，イギリスとバスクとの交易が本格的にはじまる。裕福なイギリスの貿易商人がバスクに住み込み，労働に従事した。そして娯楽としてフットボールをもたらした。しかしこの

時，鉱工業の成功でバスクにも富裕層ができており，受け入れる準備はできあがっていたと言える。イギリスがバスクに進出したのは，豊富な鉱山を買い取るだけの資金が準備されていたからである。またイギリスはバスク以外のイベリア半島南部の鉱山も手中に収めており（有名なリオ・ティント鉱山など），イギリスの経済的行動範囲は広い。このようにフットボール伝播には，イギリス人が関与し，さらにそれを受容する社会が準備されていたことになる。

ビルバオは現在スペイン・バスク州のひとつの県都である。その他にもプロのフットボールーチームを擁している都市がある。フランスバスクでは選手は排出しているが，フットボールチームはない。以下は各県のフットボールチームと設立年である。

アラバ県：アラベス Alaves（1921），ビスカヤ県：アスレティック・クルブ・デ・ビルバオ Athletic Club de Bilbao（1898），ギプスコア県：レアル・ソシエダ Real Sociedad（1909），ナバラ県：オサスナ Osasuna（1920）。

ちなみに，スペイン１部リーグで代表的なレアル・マドリッドは1902年，バルセロナは1899年である。また，アトレティコ・デ・マドリッドは1903年である。このチームはビルバオ出身の学生や労働者がマドリッドで結成したのである。

このように19世紀後半からスペインではフットボールが隆盛を極め，とくにイギリスの玄関口であったバスクはその多大な影響を受けた。

３．アスレティック小史

記録に残っている最初のフットボール試合は1894年である。ネルビオン川東岸ラミアコ Lamiako という集落は，ビルバオ市から河口へ向かって７キロ程離れている。ネルビオン川の両岸は山が近接し，平地を確保するにはビルバオから河口へ向けて移動する必要があった。対戦は当時バスクに入り込んでいたイギリス人チームとバスク人チームであり，結果は５対０でイギリ

スに軍配があがっている。同年に，スペイン南部のウェルバでもスペイン最初のフットボール試合として記録されているという。

その当時はまだ現在でいうところのフットボールチームは誕生していなかった。ビルバオでは，サマコイス・ジム（Gimnasio Zamacois）内でフットボールクラブ創設の話が持ち上がったといわれている。その後，アスレティックの重要人物となるJuan Astorkiaがまとめ役を担い，７つのグループをまとめた。ときに1898年である。これがアスレティックの創設年とされている。またCafe Garciaの客が中心となり，BilbaoFCが創られた。1901年にルールが起草され，アスレティック最初の会議が開催された。33人の創立者が集い，うち１名がAlfredo Millsというイギリス人であった。このときに会員（socio）制度が確立されている。1903年にBilbaoFCは経営難で，アスレティックに統合された。このように目まぐるしい動きの中でフットボールクラブが立ち上げられ，フットボールがバスク内に浸透していくことになるのである。フットボール熱はビルバオだけでは冷めやらず，1903年マドリッドにおいて，ビルバオ出身の学生や労働者がAthletic de Madridのクラブを創設した。

その前年の1902年スペイン・チャンピオンシップが実施され，バルセロナとアスレティックが対戦し，２対１でバルセロナが優勝した。

優秀な選手を排出するためにはユース育成が大事であると当時から言われており，1903年には，フットボール連盟所属の17才未満の選手を対象とした第１回アスレティック・カップ（＝ビスカヤ・トロフィー）が行われている。アスレティックでは1911年，フベニール（17～18才）のグループが結成された。

1913年，アスレティックのホームグラウンドとなる競技場サン・マメスSan Mamées（別名カテドラル＝大聖堂）が落成された。当時，聖マメスの祠があった所にこの競技場が建設されたのでこの名称が付けられたのである。現在でもカテドラルという名称に眉をひそめる人もいるほどスポーツと宗教

が接近し，また同時にキリスト教を前面に押し立てた名称であった。聖マメスはライオンを手なずけ従えていたことや，アスレティックのプレースタイルからライオン軍団とも呼ばれている。

1920年代から30年代にかけて，スポーツがバスク社会を活性化させたといても過言ではない。都市部ではバスク民族スポーツにかわって，近代スポーツが受け入れられ，集団的見世物としての機能を強化させた。とくに異なる社会階層がそれぞれの好むスポーツを推進して，普及につとめた。硬式テニス，ヨット，射撃，馬術，ポロ，ゴルフ，ホッケー，狩猟などである。ビルバオに通じるネルビオン川西北岸にあるネグリ，ラミアコ，またギプスコア県サン・セバスティアンに近いサラウス，ラサルテなど，近代スポーツは上流階級の拠点となる都市にできあがっていった。

プリモ・デ・リベラ独裁時代や市民戦争中は，フットボール，自転車競走，ボクシングの黄金時代といわれている。とくにアスレティックによるフットボール興行の成功は，一般の人々を競技場へと誘い，このチームの発展に多大な影響を与えた。たとえば，1935年のアスレティック試合の入場料は１～４ペセタであったが，好カードの対レアル・マドリッド戦の場合であれば，３～10 ペセタという高額でも観客席は埋まったといわれている。そして1931～36年には，リーグ優勝３回，国王杯優勝３回を達成した。

1934～35年にかけて「バスク杯」というバスクにおける４県対抗戦が実施された。これはExcelsiusというスポーツ日刊紙が発行されるきっかけになり，またスポーツと政治の関係を無視できないほどに進展させた。これをきっかけにバスク民族党（PNV＝Partido Nacionalista Vasca）は党の政策にスポーツを取り入れ，フットボール・バスクリーグの創設に関係しようとしたのである。

市民戦争中（1936～39）でもフットボール試合は途絶えることなく実施された。たとえば，1937年11月28日から1938年４月３日まで，アマチュア・アスレティッククラブ選手権が実施された。選手年齢は15～19才であり，39チー

ムがトーナメント制で戦った。

しかしフランコ独裁が始まると，様々な圧力がかけられることになる。前述したバスク語禁止例をはじめとした一連の制裁で，フットボールチーム名の改変も含まれていた。市民戦争終結時（1939）からフランコ死亡（1975）まで，英語ではなくスペイン語での表記が強制されたのである。つまりAthleticからAtlérticoへと，いわゆる屈辱的な名称変更である。

この外圧下では「カンテラ」と「清楚な選手」というイメージが他県の民衆にも受け入れられ，「11人の村人」のあとに続いていくというサポーターを形成させた。そしてアスレティックは2回のリーグ優勝（1942-43，55-56）を果たし，フランコの手から優勝カップを受け取っている。

英語名Athleticはフットボールを持ち込んだイギリスへの配慮が伺え，友好的な関係が持続していたことを推測させる。このことは他のバスク民族スポーツの場面でも見受けられるのである。たとえば，ボールゲームであるペロタの古形態についても，古いヨーロッパで実施されていた種目がここに残存しているだけであるという謙虚な姿勢は崩れないのである。

1950年代に最初の転機が訪れる。それまで形成されていた選手構成に変更が生じた。「バスクの地で生まれた者であれば，クラブ員になれる」，つまり移民や混血の存在が意識され始めたということである。「純粋なバスク人」という枠を取り除き，優秀な選手を獲得したいというクラブ側の思惑が見えてくる。これは今までの思考では無視できないほどの人物が現出したということであろう。

1960年代は「工場」としての機能を強化された。これは他のフットボールクラブが選手獲得で海外の有望選手を自チームに招き入れる事態が活発化したからである。そして1970年代になって「バスクで生まれなくても，バスクで幼少の頃から育った者はクラブ員になれる」と規制緩和がなされた。これはバスク社会で生活することが前提となる。つまりバスク文化の中で生活することにより，バスクの思考を身につける「バスク人化」＝「土着化」する

ことでもある。バスクの学校に通い，友人をつくり，祭に参加し，生活習慣を身につけ，さらにはアスレティックの戦略をたたき込まれた者が代表としてピッチに立つ。この時点でカンテラの役割はかなり重要度を増した。

1971年ビルバオ市郊外のレサマ Lezama にカンテラの総合施設ができた。3コートとクラブハウスである。その後1995年にレサマの整備が行われ，芝コート5面，人口芝コート1面，体育館，トレーニングジム，フロントン，医務室および一軍宿舎ができあがった。2000年にレサマ内にスポーツ医学研究所が開設され，最新の研究と医学的処置が同時に進められている。さらに2001年にレサマの西隣町であるデリオ Derio に学校教育に関する施設が増設された。つまり，年少者には学校教育をしっかりと受けさせ，手厚い保護のもとに合宿生活を送り1軍を目指すのである。

筆者が聞き取りをした2005年には今までの枠をさらに拡大する方針が打ち出された。トレーニングにおける使用言語を現在のバスク語とスペイン語に加えて，英語とフランス語も使用するというものである。海外移民の子孫だけでなく，海外の有望な人材を集めることを前提としている。バスク人だけにとらわれない政策が必要になっているのであろう。選手育成という初期の目的は変化することなく，対象をバスク人以外にも門戸開放しているのである。高額の移籍金を支払い外国人を雇い入れることをせず，年少者を将来の選手として育てるという時間のかかる政策に対して，ビルバオの人々は温かく見守っている。

しかしこの政策が成功しているとは言えない。スペイン選抜のキャプテンを務めたユーレン・ゲレロは別格としても，近年はチームは低迷を続け，2軍落ちという過去に例を見ない危機が訪れている。

4．カンテラ cantera の現在

現在のカンテラは，まず1軍のアスレティック・クラブ・デ・ビルバオ，2軍のビルバオ・アスレティック，3軍のバスコニアである。これらはプロ

として登録されている。次にカンテラとしては，フベニール（17～18才）A・B，カデテ（15～16才）A・B，インファンティル（13～14才）A・B，アレビン（11～12才）A・Bである。これはスペインのスポーツ政策の分類基準を採用しており，かなり細分化されている。他のスポーツ種目も同様にこれらのカテゴリーに所属し，チーム編成がなされているのである。このカンテラの目的は，小学校高学年から育成にとりかかり，高校卒業までに年齢に応じたチーム編成でトレーニングを続けることである。もちろん各年齢別ユース間での大会は両親や友人の観戦を促し，将来の1軍入りの試金石にもなっている。18才以上になればユースを卒業し，1軍へ入る年齢的資格ができあがる。そして元1軍選手から指導を受けられるという年少者にとっては魅力的なシステムが整っている。

このアスレティック・クルーブ・デ・ビルバオは，バスク人のみのフットボールチームとして有名である。アスレティック関係者やサポーターは全員口をそろえて「バスク人」を強調する。選手の出自がバスク以外の県や中南米であっても，両親がバスク人，混血ではないかなどと推測の域をでない説明になる。しかしチームから少し距離を置いている人に言わせれば，すでにバスク人以外の選手がピッチに出入りしており，「バスク人」のみのチームは間違いであるという。事実，1919年まではイギリス人がピッチに立っており，それ以降はバスク人のみと言われている。アスレティックにとっては「スペイン最初」及び「バスク人のみ」のチームであることが重要なのである。この2つの事柄に関しては，優勝劣敗の世界にいる他チームはあまり関心を示さない。

一方，チームを率いる監督も1933年まではイギリス人であった。その後，バスク人監督が指揮を執っている。つまりピッチに立つ選手がバスク人であればいいのである。

今までのアスレティックに関する「バスク人選手」の定義は，①バスク生まれであること（戸籍），②バスク人の家系であること（他県出身でもOK：

移民や混血など)，③年少者はカンテラでトレーニングすること，④1部の他チームでプレイしていても上の3つのいずれかに該当すること，が課せられている。現在は③のカンテラでのトレーニングが最重要項目になっている。

小史のところでふれたように，アスレティック選手であるためのバスク人の定義が少しずつ変化し始めている。1940年代まではフットボールができる階層は限定されていた。それが50年代になれば「バスク生まれ」がクラブ員への資格となった。戸籍がバスクであれば問題なく選手になれるという意味である。この時期は他チームが力をつけリーグや国王杯などで苦戦しはじめたこととも関係すると思われる。さらに56-57年にはヨーロッパ・カップへ初めて参戦し，選手強化が大きな要因として浮上した。スペインの他地域から大量に労働者が入り込み，その子孫が無視できないくらいの活躍を見せ始めたということであろう。

さらに70年代には，「バスクで幼少から育った者」はクラブ員になれる。戸籍がバスク人でなくても可能ということである。日本人でも幼少からバスクの学校へ通い，生活できれば可能となったのである。これはバスク人のみに固執していてはスペインリーグで十分な活躍ができないということとも関係があった。その人材を外部に求めるものの，日常生活はバスク内で過ごし，チームに見合った選手を自分たちで育成することになった。ここで「バスク人」にこだわらない表明がなされたが，実質的にはバスク語やスペイン語を話せるバスク人に限定されたのである。学校教育はバスク語やスペイン語授業を選択できるが，その言葉の壁を越えてフットボールを目指す年少者は皆無であった。70年代は一度もリーグ優勝を果たせずチームの低迷が続いていたことも一因としてあげられる。

現在，アスレティックの会員になるためには，事前に予約をして会員の空きが出るまで待たねばならない。2004年度は約350人の新会員が誕生した。今予約すれば何年待たねばならないか予測はできないといわれている。会員数は現在36,000人である。座席は40,000席あり，残りの4,000席は試合ごとに

一般人に売り出されたり，役員や選手の招待席として利用される。会員はさらに座席の位置を指定して年間座席予約が可能である。

5．紐帯「バスク」の生成

試合開始前，観客を鼓舞する掛け声が響き渡りそれに答えると，「モルボ morbo」といわれるサポーターにスイッチが入り選手とともに戦闘態勢に入る。確かにサポーターの多くはアスレティック選手の動きに一喜一憂する。無意識のうちに形成されたアスレティックへの想いはバスク大学副学長をして「空気」のようだと言わしめる「紐帯」として機能する。ごく普通の家庭でも共通の話題としてフットボールに参加し，みんながそれぞれ持論を主張し始める。そこでは単なるスポーツではなく，「われわれの」という暗黙の了解事項が内在しているのである。

「われわれ」と言わなければならない理由として，自他の区別をつけねばならない歴史的社会的状況があげられる。一つには，ビルバオ港の貿易や鉱工業であった。20世紀初期，労働を求めて外部の労働者が大量に入り込み，彼らの娯楽や生活様式が少しずつバスクにおける文化や価値に影響を与えたことである。その典型がスペクタクル性の高いバスク民族スポーツの隆盛である。たとえば，ペロタというボールゲームは，テニスのようにカウントする形態は隅に追いやられ，かわって1点，2点という得点形式が主流になっていったこと，さらにスピーディな展開が楽しめる用具を用いたセスタ・プンタ（ハイ・アライ）などに観衆は熱狂し始めた。一方，マノ（素手）の競技は衰退の一途を辿った。

また1936～75年，フランコによりチーム名を「アトレティコ atlético」というスペイン語に強制的に変えられたこともバスク人の絆を強固にした。これはバスク語使用禁止令とともに，バスクにとっては屈辱的であった。，スポーツとは直接関係ないが，彼らが保持していた地方特権の廃止（fuero という地方特権を定めた法律，ex. 税金優遇，共有地の剥奪など）が日常生活

にも多大な影響を与えた。さらにバスク文化の禁止（バスク舞踊，カーニバルなど）も大きなダメージであった。

フランコの禁止令がかえってバスクアイデンティティを鼓舞し，強烈に一つに固まっていった。バスクの都市に移入した人々をつなぐいわゆる紐帯となったスポーツが，フットボールつまりアスレティック・クラブ・デ・ビルバオであった。フランコが擁護した「レアル・マドリッド」戦は，ことのほかバスク人には重要性をもつ。フランコもレアル・マドリッドは自らの分身であると主張していたほどである。これはバルセロナがあるカタルニア地方も同じであり，スペイン内戦での敗北は中央集権への反発として現在でも健在である。

この反中央集権については，現在のバスク観を形成しているバスク神話について述べる必要があろう。

バスクは独特であるという「バスク神話」は14～16世紀にかけて創生されたという。渡辺によれば，①バスク国はどこにも属したことがなく，特権を防衛する戦いをした経験がある，②ビスカヤ人は独自性を保持していた，③バスクはローマの支配に屈しなかった，④原始的キリスト教以前に一神教の存在，などの「歴史ドグマ」が創られ，一般に流布し始めたという。そして19世紀に外国に出回った旅行案内書にバスク通史が登場し，統一性を持たせて描写されたことなどを指摘している。さらにヨーロッパ・ロマン主義がヨーロッパ先住民としてのロマンをもかき立てたともいう。

その同じ19世紀から，神話がバスク民族主義運動と連動しバスク全土に広がりを見せ始めた。失われる伝統や文化にバスク的なものを求め，神話と結びついたのであった。この神話が再度意識し始められるのは独裁者プリモ・デ・リベラ軍事独裁（1923～30）およびフランコ専制支配時代（1939～75）である。反中央集権の行動はバスク人を結束させ，民族解放の武力闘争を大衆が支持した。この社会的状況の中で育まれていったフットボールはもちろん多大な影響を受けた。裕福な人々から労働者階級へのフットボール普及が

神話に拍車をかけた。それがバスク人のみのチーム編成である。しかしその後の経済成長とともに，バスク神話とアスレティックさらに価値変化を求める人々により，「バスク純血主義」の緩和が迫られたのである。このような動態的変化を経ても「われわれ意識」が健在であることには変わりはない。

会員の意志を伝達する手段として，アスレティック・クルブ・デ・ビルバオの会長選出をあげることができる。会員は出資しているチーム会長の行動を監視し，4年に一度の会長選挙でその審判をする。したがって会長はアスレティックに関するすべての責任を負うことになる。とくに低迷する時にこそその評価は厳しくなる。昨年度（2005-06）の競技実績はあまり芳しくなかった。その理由としてビルバオ担当記者（Deia紙）は，「2004年に新会長が誕生し，強化計画がまだ浸透していない。もう少し様子を見る必要がある。」とし，それを聞いた市民は「結果が出なければ，応援しても意味がない。」と手厳しい。このような会話が通りで展開され，また夕食の話題としても取り上げられる。筆者の友人は生まれたばかりの息子に自分の隣の会員席を確保した。まだ一緒に見に行けないが，子供が行けるようになれば毎試合見に行くと楽しみにしている。

これらの例からもわかるように，共通項としてのアスレティックはビルバオ市やビスカヤ県では不可欠の存在として見ることができる。

最後に，カンテラの生え抜きとしてユーレン・ゲレロ Julen Guerrero（1974～）をあげることができるであろう。かれは8才からカンテラに入り各カテゴリーにおいて活躍したのはもちろんのこと，1軍に入って大活躍を見せた。またスペイン選抜としてプレーし，キャプテンにも抜擢された。昨年度に引退するまで常にアスレティックをリードし，精神的な支えとしても後輩から尊敬されてきた。通算ゴール101点はゲレロの優秀さを物語っている。サン・マメス競技場内にある展示館には，ゲレロの各ユース時代のIDカードが展示され，彼は特別な存在であることを示している。

結　語

ヨーロッパ先住民と言われているバスク民族が伝統を固守して生活をしているという一般的な言説とはことなり，フットボールという外来文化をいち早く取り入れ，彼らの文化の一部となるように努力をした。その姿勢はオーセンティシティを遵守するのではなく，他者（＝文化）と対峙したその時々で必要な選択をしてきた例であろう。それが，農村部や海岸部ではなく，都市の住民であった。民族スポーツであるペロタを愛好してきた人々がフットボールに没入する。このマルチなアイデンティティが様々な文化を受け入れる素地を形成してきたと思われる。

しかし依然として，無意識下に潜伏しているバスク純血主義が顔をもたげる時がある。「すべての選手がバスク人」という言説には，反中央政府という疼きが顔をもたげるときである。またカンテラというユース育成期間に見られるように，「われわれ＝バスク」意識を共有するシステムはアスレティックがとる方法でもある。これは他者を受け入れ共同生活をするというバスク人が歴史から学び培ってきたものなのかも知れない。

しかしマックランシーをして言わしめているように，ヨーロッパ先住民が斬新的な取り組みに積極的に参与していることは事実である。とくにビルバオは「汚い」都市からの脱却をはたすべく，都市全体のデザインを再考しつつある。その中心の一つがサン・マメス競技場である。そしてそこで活躍する選手を排出する機関が，カンテラである。

本論文は，平成16～19年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究B（「バスク民族のスポーツ文化政策に関する総合的調査研究」研究代表者　竹谷和之：課題番号16300211）の研究成果の一部である。

参考文献

Antonio de Rujo, *Gainza, brujo del fútbol,* Ediciones Laga, Bilbao, 1997.
Bizkaiko Aurrezki Kutxa, *San Mamés La Catedral 1 y 2,* Ibc, Bilbao, 1982.

Fernández Santander, C., *El fútbol durante la guerra civil y el franquismo,* Editorial San Martín, S.L., Madrid, 1990.

フィル・ボール著，近藤隆文訳，『バルサとレアル　スペイン・サッカー物語』日本放送出版協会，2002年。

J=L・ナンシー著，西谷修，安原伸一朗訳『無為の共同体　哲学を問い直す分有の思考』以文社，2001年。

楠貞義，ラモン・タマメス，戸門一衛，深澤安博，『スペイン現代史』大修館書店，1999年。

Leguineche, M., Unzueta P., Segurola, S., *Athletic 100 conversaciones en La Catedral,* Ediciones Santillana, S. A., 1998.

MacClancy (ed.), J. *Sport, Identity and Ethnicity,* Berg, Oxford, 1996.

Manuel Alonso, J., *Athletic for ever! 1898-1998,* Bilbao Bizkaia Kutxa, Bilbao, 1998.

Santiago de Pablo, *Trabajo, diversión y vida cotidiana El País Vasco en los años treinta,* Papeles de Zabalamda, S.L., Vitoria-Gasteiz, 1995.

Xabier Fernández, P., *Historia del Fútbol Vasco tomo* II *Athletic Club,* Aralar Liburuak, 2001.